

(3)釜石におけるこれまでの防災

菊池 郁夫 （釜石市教育委員会 教育次長）

おはようございます。遠くから鉄と魚と、さきほど先生がおっしゃいました防災教育の町、そしてラグビーの町、釜石へようこそおいでいただきました。今、釜石はラグビーワールドカップの誘致を進めておりまして、そのアドバイスをいただいております盛岡工業ラグビー主将である、そして明治大学のラグビー部主将である、そして全日本選手の笹田さんも今日は特別参加をいただいておりますのでご紹介させていただきます。



釜石ですが、これまで何回も津波で大きな被害を被っております。明治 29 年には明治三陸大津波がありました。その時の被害を申し上げます。当時は合併前で釜石町という町があり人口が 6,500 人でした。その中で亡くなった方は、なんと 4,041 人という被害でした。釜石全体でいいますと 10,000 人くらい亡くなっております。また、今回の 3.11 の津波でも大きな被害を受けた釜石のすぐ北のところにあります両石という町では、明治の津波でも壊滅的な被害を受けております。両石では当時の全人口 958 人のうち、824 人が亡くなっております。負傷者は 126 人ということで、無事だったのは 10 人程度という大きな被害を受けている町です。さらには昭和 8 年の 3 月昭和三陸大津波では、約 43 の方が亡くなっております。幾度と被災をしている町でございます。

そういった中、釜石での防災についてですが、平成 8 年以前は防災課という組織はございませんでした。総務課の中の一担当者が片手間に防災をやり、3 月 3 日昭和の三陸大津波の記念の日には津波避難訓練を実施するというので防災の取組をしていたというのが現状でございます。その後、平成 8 年にやっと防災係というものができまして、平成 12 年には消防防災課ができました。そちらの課長は消防署の署長が兼務するという状況でやっておりました。そういった中、平成 15 年に台風 6 号で大きな被害を受けまして、釜石でも土砂災害による死者が出まして、専任の課長を置くようになりました。その当時は土砂災害防止法ができたときで、どちらかといえば土砂災害の方に目を向けていた時代でした。

平成 16 年にどういわけか私が消防防災課の課長になってしましまして、どうしたら良いものか、津波の避難訓練をやっても参加する人が少ないという悩みを持っておりました。そうした中で 4 月に仙台で洪水・津波・高潮のハザードマップができたので講習会に出て行きました。そこで基調講演の講師をやっておられたのが、片田先生でございまして、『尾鷲市の動く津波ハザードマップ』を紹介していただきました。その月の末に突然、片田先生から電話があり、釜石でもやってみないかという話でした。渡りに船ということで飛びつきました。ただ、釜石には湾が 4 つ釜石湾、唐丹湾、両石湾、大槌湾があります。「4 つやっただけませんか」とお願いをしましたところ、「想定しているのは釜石湾だけ」とは言われましたが、なんとかお願いしました。そこで作っていただいたのが、四つの湾の動く津波ハザードマップでした。それができたのが翌年の 2 月で、できた記念に片田先生に講演をしていただきました。津波のハザードマップや、当時のインド洋沖津波の画像を見せていただきながら、講演をしていただいたわけですが、なかなか理解をしていただけませんでした。「せっかく湾口防波堤が出来て安全な町になったのに、なんでこうやって脅すんだ」という話で食い下がる人がいました。そういうことを続けてまいりましてなかなか浸透しないということが現状でした。その頃の釜石における防災教

育については片田先生のお話を聞いてご存知だと思います。当時、10年前の平成16年に来たときから「釜石に津波文化の醸成をする」と言っていたき、「ある程度の期間、釜石に入りたい」ということを言っていたいていました。私は平成16年で消防防災課から移動となったのですが、次の課長には「何があっても片田先生だけは離してはダメだぞ」ということだけを引き継ぎしてきました。

しかし、どういうわけか行った先々、仕事で片田先生と会う機会がありました。そして毎年一緒に飲んでばかりいました。片田先生は釜石の魚を食べに来ているのかと思うくらいです。それが今につながっているという状況です。